

氏名（本籍）	李 東 輝（中華人民共和国）
学位の種類	博士（文学）
学位記番号	博課第248号
学位授与年月日	平成17年3月24日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当 人間文化研究科
論文題目	中国農村地域における「男児選好」意識の維持メカニズムに関する研究
論文審査委員	（委員長） 教授 澤 井 勝 教授 清 水 新 二 助教授 宮 坂 靖 子 教授 中 道 實

論文内容の要旨

本研究の主題は、女性の社会進出、女性の地位向上が著しいと言われている中国において、今なお農村部に強固に残存している「男児選好」の維持メカニズムを解明することである。子どもの性別選好意識に影響を与えている要因を、社会的な要因をふまえつつ、家庭内における女性の地位や子どもに対する価値観、地域慣習に着目し明らかにすることが本研究の目的である。より具体的には、①中国農村地域における子どもの性別選好意識の実態を把握し、②「男児選好」意識の維持メカニズムを地域的要因、家庭内での女性の地位と親にとっての子どもの価値に着目して明らかにし、③「男児選好」意識の維持メカニズムを把握した上で、「男児選好」意識を弱化させるために必要な要因、および「男児選好」がもたらす諸問題を解決するための諸要因を検討することである。

本論文は、序章、理論編（第1～3章）、実証編（第4～6章）、考察編（第7章）から構成されている。

序章では、研究の目的と方法、研究調査の概要、論文の構成、研究の意義と位置づけ、研究視点がまず述べられている。

理論編（第1～3章）では、中国における子どもの性別選好意識の変遷と現状を考察し、「男児選好」意識の実態とその問題点を提示した。続いて、伝統的な産育観念の変遷から、男児選好意識に影響を与える重要な要因の一つとして、「多産」に着目し、その歴史的変遷と多産に影響を及ぼした要因を考察した。最後に、中国と諸外国における「男児選好意識」に関する先行研究のレビューを行い、分析枠組みを提示している。

第1章「中国における性別選好意識の現状とその変遷過程」では、まず、清代における「溺女」（女兒間引き）現象および「男児願望」に関わる文化的な慣習―「析子風俗」と「溺女」現象から、歴史的に「男児選好」と女兒差別の実態を考察した。そして、1979年の「一人っ子政策」実施以降に生じた性別選択中絶、性比アンバランスの問題と「漏報」（子どもが生まれても戸籍に登録しない）問題に関する考察を通して、農村における「男児選好」意識が、「一人っ子政策」実施後にむしろ強化されたことを指摘し、「一人っ子政策」の展開に即して生じた社会問題を指摘した。

第2章「中国における産育の変遷―『多産』を中心にして」では、中国における産育観念の特徴を明らかにした上で、産育観念の中核である「多産」を中心に、その歴史的変遷と特徴、及び「多産」に影響を与える要因を考察し、伝統的な「多子多福」という産育観念が子どもの性別選好意識に与えた影響を明らかにした。

第3章「中国における『男児選好』に関する先行研究の課題」では、「男児選好」意識に関する先行研究をレビューし、諸外国の「男児選好」意識と比較検討し、調査対象者に関する問題と研究視点上の問題などを指摘した上で、本研究の分析枠組みを提示した。

本研究では、子どもの性別選好意識を、（1）背景的要因、（2）地域共同体的要因、（3）家族的要因、（4）親にとっての子どもの価値観、（5）個人的要因の5つの領域から全体的に考察してはいるものの、本研究の独自の視点は、特に（2）、（3）、（4）からのアプローチにある。これはいずれも従来の先行研究では採用されていない、オリジナリティに富むものである。

次に、実証編に入るが、ここでは以下に記す2つの調査に基づいて展開されている。

1つは、2000年3月と8月に行ったインタビュー調査であり、インフォーマントは、「計画外出産の子ども」の産みの親21人と「隠された子ども」の実親5人、養母5人である（以下、【調査A】と表記する）。他は、2002年の4～5月に行ったアンケート調査であり、2002年4月現在で50歳以下の既婚の夫婦249世帯に、夫票・妻票を配付した。有効回収票は男性232票、女性233票、全体の有効回収率は93.4%であった（以下、【調査B】と表記する）。

第4章「農村地域における子どもの性別選好意識とその規定要因」、その1「農村地域における『隠された子ども』の生活実態」では、農村部における子どもの性別選好意識の実態を明らかにするために実施した、農村部における「隠された子ども」に着目したインタビュー調査【調査A】によって、①地域対象地域に生活している「隠された子ども」の性別がほとんどが女兒（39人中、33人）であり、「男児選好」のため、女兒が隠されて育てられていること、②このような「隠された子ども」たちは、教育と生活の両側面で差別されていることが明らかになった。「隠された子ども」が生じた要因に関しては、①強い男児願望意識、②老後の世話を息子に依存する意識、③「跡継ぎ」意識、④本地域の政策と政策実施の地域差、⑤出産に対する意思決定権が夫にあること、⑥親族の援助ネットワークの強さ、などが抽出された。

第4章、その2「農村地域における『男児選好』意識の実態とその規定要因」では、子どもの性別選好意識の実態とその要因を明らかにするために、2002年にアンケート調査【調査B】を行った。その結果、調査対象地域においては、「男児選好」意識が依然として強固に存在すること、特に男性にその意識が強いことが明らかになった。「子どもの性別選好」意識を規定する要因として、①伝統的な「家の継承」という家父長制的意識の残存、②福祉制度の未整備、③地域の人々における子どもの性別選好意識などが抽出された。

続いて、第5章「農村地域における親にとっての子どもの価値と子どもの性別選好」では、親にとっての子どもの価値意識の実態を把握した上で、親にとっての子どもの価値に影響を与える要因を考察し、親にとっての子どもの価値と子どもの性別選好意識との関係を明らかにすることを試みた。【調査B】により、親にとっての子どもの価値が多様化した、本調査対象地域においては、依然として子どもの「経済的な価値」と「家の継承的な価値」が重視されていることが明らかになった。しかし同時に「子どもは夫婦の絆を深める」「子どもは理屈ぬきにかわいい」「子どもは生き甲斐」という「情緒的な価値」も重視する傾向も浮かび上がった。

また相関分析の結果、親にとっての子どもの価値は、「年齢」、「教育歴」、「老親の世話と介護意識」、「老後の生活を子どもに頼る意識」と有意な関連があることが確認された。さらに、「子どもの経済的な価値」と「家の継承的な価値」を重視する人に、「男児選好」意識が強いことも明らかになった。

次に、第6章「農村地域における性別選好意識と女性の家庭内での地位との関連」においては、農村地域における女性の家庭内での地位の実態と子どもの性別選好意識との関係を考察し分析した。

「その1 農村地域の女性の出産意識に影響を与える要因に関して」では、農村地域における「計画外出産」の子ども（黒孩子）に関する【調査A】を通して、「計画外出産の子ども」が多く存在していたが、徐々に減少しつつあることと、「男児選好」意識がまだ根強く存在しているが、「男児選好」意識が希薄化した事例もみられるようになりつつあることなどが明らかになった。また、農村女性の出産意識に影響を与える要因として、①老後保障制度の不備による影響、②「跡継ぎ」という伝統観念からくる影響、③地域慣習と周囲のプレッシャーからくる影響、④女性の家庭内での低い地位に起因する影響、⑤女性の低い教育レベルに由来する影響があることが明らかになった。

「その2 女性の家庭内での地位と子どもの性別選好意識との関連」では、家庭内の役割分担・意思決定の実態と「男児選好」意識と女性の家庭内での地位との関連を明らかにすることを試みた。その結果、2002年に行ったアンケート調査【調査B】から、本地域において、男性が家事の多くを分担するようになったが、依然として女性がより多くを担っている実態が明らかになった。しかし、家庭内の家事役割分担・意思決定の実態と「男児選好」意識との有意な関連性は認められなかった。

考察編、第7章「性別選好意識の実態と『男児選好』意識の維持メカニズム」において、実証編の知見に基づいて、本研究の中心テーマである、子どもに対する性別選好意識の実態と「男児選好」意

識の維持メカニズムについての総合的な考察を行った。本地域において「男児選好」意識が依然として強固に存在していること、「男児願望」のため、女兒と女兒を産んだ女性への差別が存在しているという知見は先述したが、そのような「男児選好」意識を維持するメカニズムとして、①「跡継ぎ」という家父長制意識の残存と、女性への役割期待観という文化的要因、②農業生産力の低下という経済的要因、③制度・政策などの背景的要因、④福祉制度の未整備、地域慣習と周囲のプレッシャー、人口政策とその管理、および親族ネットワークの存在などの地域的要因、⑤女性の低い家庭内での地位という家族的要因、⑥子どもを「経済的な価値」、「家の継承的な価値」とみなす親の意識的要因などが存在することを指摘した。

終章「本研究のまとめと今後の課題」では、「男児選好」の維持メカニズムを弱化させるために必要な、農村地域の社会保障制度の整備、高齢者の自立を支える地域的な援助のネットワークの形成、女兒と女性の教育レベルの向上、地域住民の自治能力の向上などの必要性について具体的に提言を行った。最後に、今後の課題として、方法論的問題として、調査方法と調査地域に関する問題と、考察視点に関する問題として、農村と都市の比較研究の必要性等を指摘した。

論文審査の結果の要旨

本研究は、今なお中国農村部に強固に残存している「男児選好」の実態とその維持メカニズムを解明することを目的とした研究であり、具体的には、まず第一に、中国農村地域における子どもの性別選好意識の実態を把握し、第二に、「男児選好」意識の維持メカニズムを明らかにし、そして第三に、「男児選好」意識を弱化させるために必要な要因を検討した上で、「男児選好」がもたらす諸問題を解決するための政策を提言している。

本論文の意義は、テーマ、視点、方法、それぞれにおいて見られる。

まず第一に、テーマ設定に関する学術的な先駆性が挙げられる。中華人民共和国の成立から五十余年が経過し、中国では社会主義体制の元、男女平等施策が進められてきた。しかし他方で、一人っ子政策実施以降、女兒中絶、女兒捨て、女兒の人身売買などが大きな社会問題になっている。特に本論文で扱った「計画外出産」の子ども、すなわち「黒孩子」（ヘイハイズ）問題は、中国における人口センサス実施の最大の問題として大きな社会的関心を集めるとともに、中国の一人っ子政策のもたらした子ども（特に女兒）の人権問題としてもその重要性を認識され始めた社会的問題である。にもかかわらず、このテーマに学術的に本格的なアプローチを行った研究は未だ存在しない。

第二に、研究視点に関する独創性が挙げられる。本研究が「黒孩子」問題に学術的にアプローチした端緒であることは先に述べた通りであるが、性別選好自体は中国に古くから存在し、その研究は蓄積されてきている。しかし従来の研究の多くは、経済発展と儒教文化というマクロ的視点からなされたものであった。本研究のもっとも独創的な点は、男児選好意識の維持メカニズムを、女性の家庭内での地位を中心とした家族的要因、親にとっての子どもの価値という意識的要因、および地域共同体的要因から明らかにすることを試みたことであり、これは中国の性別選好研究史上、特筆すべき分析視点となるものである。

第三には、丹念かつ緻密な調査に基づいた実証性が挙げられる。本研究は、2つの調査に基づいて展開されている。一つは、2000年3月と8月に行ったインタビュー調査であり、インフォーマントは、「計画外出産の子ども」の産みの親21人と「黒孩子（隠された子ども）」の実親5人、および養母5人である。決して数的に多いものではないが、黒孩子の産みの親と養い親に対して、直接丹念なインタビューを行った研究は皆無である。また、このインタビュー調査のもつ限界を超えるために、さらに、2002年の4～5月に、2002年4月現在で50歳以下の既婚の夫婦249世帯に、夫票・妻票を配付するアンケート調査を行った。有効回収票は男性232票、女性233票、全体の有効回収率は93.4%であったが、これは対象地域の悉皆調査に相当する大変勢力的なものである。本研究はこれら2つの綿密で根気の

いる調査に裏付けされた実証研究である点において大きな学術的意義を有している。

本論文は、序章、理論編（第1～3章）、実証編（第4～6章）、考察編（第7章）から構成されている。

序章では、研究の目的と方法、研究調査の概要、論文の構成、研究の意義と位置づけ、研究視点がまず提示される。

理論編（第1～3章）の第1章では、清代における「溺女」（女兒間引き）現象および「男児願望」に関わる文化的な慣習－「祈子風俗」と「溺女」現象から、歴史的に「男児選好」と女兒差別の実態を考察し、男児選好意識それ自体は、中国における小農経済と家父長制的家制度の確立と同時に成立したものである点を指摘した。また、1979年の「一人っ子政策」実施以降に生じた性別選択のための中絶、そこから生じている性比アンバランスの問題と「漏報」（子どもが生まれても戸籍に登録しない）問題に関する考察を通して、農村における「男児選好」意識が、「一人っ子政策」実施後にむしろ強化されたことを指摘し、男児選好意識の現代的特質を明確にした。

第2章では、中国における産育観念の特徴を明らかにした上で、産育観念の中核である「多産」を中心に、その歴史的変遷と特徴、及び「多産」、「多子多福」に影響を与える要因を考察した。その結果、「多産」維持要因の一つが、1978年以降の農村の生産方式の変革と農村部の老後保障の未整備であることを指摘した。

第3章では、「男児選好」意識に関する先行研究のレビューを行い、諸外国の「男児選好」意識と比較検討を行った。先に本研究の視点の独創性について説明したが、本研究の視点は、これらの先行研究のレビューから理論的に抽出されたものである。本章での成果は、この視点に立脚した本研究の分析枠組みの提示にある。

本研究では、子どもの性別選好意識を、（1）背景的要因、（2）地域共同体的要因、（3）家族的要因、（4）親にとっての子どもの価値観、（5）個人的要因の5つの領域から全体的に考察しているが、本研究の独自の視点は、先にも述べたように特に（2）、（3）、（4）からのアプローチにあり、それがこの領域におけるこれからの研究に対する貢献であると評価される。

実証編においては、調査対象地域は、戸籍への漏報率および経済水準を勘案し、「黒孩子」が多く存在すると見られている貧困農村の特徴を良く備えている中国東北部の農村が選択された。第4章、その1では、農村部における「隠された子ども」（「黒孩子」）に着目したインタビュー調査によって、①本地域に生活している「隠された子ども」の性別がほとんどが女兒（39人中33人）であり、「男児選好」のため、女兒が隠されて育てられていること、②このような「隠された子ども」たちは、教育と生活の両側面でいかに差別されているかをその実態に即して明らかにした。さらに、「隠された子ども」が生じた要因として、①強い男児願望意識、②老後の世話を息子に依存する意識、③「跡継ぎ」意識、④本地域の政策と政策実施の地域差、⑤出産に対する意思決定権が夫にあること、⑥親族の援

助ネットワークの強さ、を指摘した。

第4章、その2では、その1で得られた知見の実証性をより高めるために行ったアンケート調査に基づいた考察を行い、本地域においては、「男児選好」意識が依然として強固に存在すること、特に男性にその意識が強いことが明らかにした。「子どもの性別選好」意識を規定する要因として、①伝統的な「家の継承」という家父長制的意識の残存、②社会福祉制度の未整備、③地域の人々における子どもの性別選好意識を抽出した。

続いて、第5章では、「親にとっての子どもの価値」意識の実態を把握した上で、「親にとっての子どもの価値」に影響を与える要因を抽出し、「親にとっての子どもの価値」と子どもの性別選好意識との関係を考察した。「親にとっての子どもの価値」についての主成分分析の結果、「経済的価値主成分」、「情緒的価値主成分」、「負担・不満価値主成分」、「家の継承価値主成分」が抽出されたが、この4主成分の中で、「子どもの経済的価値」意識と「家の継承的価値」意識が高い人ほど男児選好意識が強くなることを明らかにしたことは本論文でも特に注目すべき知見の一つである。

また相関分析の結果、親にとっての子どもの価値は、「年齢」、「教育歴」、「老親の世話と介護意識」、「老後の生活を子どもに頼る意識」と有意な関連があることも示された。

次に、第6章、その1では、「計画外出産」の子どもに関するインタビュー調査から、農村女性の出産意識を規定する要因として、①老後保障制度の不備による影響、②「跡継ぎ」という伝統観念からくる影響、③地域慣習と周囲のプレッシャーからくる影響、④女性の家庭内での低い地位に起因する影響、⑤女性の低い教育レベルに由来する影響があることを明らかにした。

その2では、家庭内の役割分担・意思決定の実態を明らかにした上で、「男児選好」意識と女性の家庭内の地位との関連を分析した。本地域において、男性が多くの家事を分担するようになったが、依然として家事負担が女性に多く偏っている実態が明らかになった。しかし、家庭内の家事役割分担・意思決定の実態と「男児選好」意識との有意な関連性は認められなかった。本研究の主要な仮説の一つが実証されなかったことは残念ではあるが、性別役割分業に関して、家事・育児と仕事という女性の二重役割があるにもかかわらず、女性たちは夫婦関係を平等と認識していること、性別役割分業度の強い女性ほど男児選好意識が強いことなど、女性の意識面での問題が明るみに出されたことは評価に値する。

考察編の第7章において、実証編の知見に基づいて、子どもに対する性別選好意識の実態と「男児選好」意識の維持メカニズムについての総合的な考察が行われた。(1) 背景的要因、(2) 地域共同体的要因、(3) 家族的要因、(4) 親にとっての子どもの価値観、(5) 個人的要因という5領域から総合的に分析・考察した結果の中でも、特に、第二の地域共同体的要因としての、福祉制度未整備の影響、地域的な慣習と世論のプレッシャーの影響、血縁的援助ネットワークの影響と、第四の「親にとっての子どもの価値」意識の影響を、丹念な調査に基づいて実証的に検証したことが、本研究の

中でも特に高く評価できる点である。

以上のような点から、本研究は、中国における性別選好研究に新しい視点と方法による貴重な知見を加えた点において、中国における性別選好研究に新たな可能性を拓いたものであると評価したい。さらに性別選好研究を、家族社会学やジェンダー研究と接合する展望を開くことにも成功している。また、一人っ子政策の実施以降強化されているとも見える、現代的男児選好意識の問題を解決するための具体的提言を先行研究が乏しい中で行うなど、学術的のみならずその社会的・実践的意義にも留意したい。研究の端緒としてまだ不十分であるこれら家族社会学やジェンダー研究との接合や、より説得力ある提言などはこれからの課題として有意義である。

以上の審査結果に基づき、本審査委員会は、本論文が奈良女子大学博士（学術）の学位を授与するに十分な内容を備えているものと判断する。